

HWH (Healing the Wounds of History:歴史の傷を癒す)に参加して ～戦争と暴力への影響に対する、これまでの私の関わりから～

渡邊佳代

2007年、私は国際会議「南京を想い起こす～南京の悲劇70周年記念」に参加した。私が戦争と暴力の影響について関心を持ったのは、これまでに私が臨床活動を通して女性と子どもの支援に携わってきたことと、私自身の根本に関わる問題として、祖父母や父母から受け継ぎ、あるいは受け継がれなかった戦争と暴力のトラウマについて感じてきたからである。

私は幼い頃から、中国や北朝鮮のニュースが取り上げられるたびに、感情的になる父を見てきた。そうした父を見るのは苦痛であり、嫌悪感でいっぱいだったが、父方の祖父の葬式で、腕を怪我した祖父が戦争に行けずに生涯苦しんだ話を繰り返す父を見て、父の背景にある深い悲しみと傷つきを知った。

母は幼い時に、祖父から満州のハルピンで軍曹をしていた話を聞いてきたが、全部話を忘れてしまったという。母方の祖父は、満州の大きな家から持ち帰ってきたという掛け軸と右大腿部に弾丸を埋め込んだまま帰ってきた。どうやって生き延びたのか、生きて日本に帰って来ることができたのか、母に聞いても分からなかったし、母も祖父が戦争中に何をしていたかを知りたくないと言っていた。撃たれて、それでも帰ってきた祖父の生命は、祖父が生き残ったために亡くなった多くの生命があったのだろうと思う。

母方の祖父は、私が小学6年生の時に亡くなったが、祖父は私をとててもかわいがり、優しく正義感のある人で、私は祖父が大好きだった。その祖父が「戦争は怖い。人殺しを多くした方が正義になる」と寂しそうに言っていたことが、強く印象に残っている。幼い私にとって、祖父が殺した相手は、鬼でなければならなかった。殺された人に家族があり、生き残れば私のような孫が生まれたかもしれないと考えれば、祖父は恐ろしい人殺しになる。そうして、私も祖父の加害を否認してきたのだろう。そう考えれば、母が何度も聞いた祖父のハルピンでの話が全て忘れ去られるのも納得がいく。

母にはあまりに近すぎて忘れ去られてしまった話と、父の悲しみと傷つき。きちんと清算されずにきた戦争や暴力の影響は、その後の世代にも綿々と引き継がれていくように感じた。二世代後の私なら、少しでも耳を傾けられるかもしれない、何かのきっかけになればと、2007年の国際会議に参加することを決めた。

2007年の国際会議では、生存者の証言に耳を傾け、私設記念館や燕子磯の記念碑を訪れ、シンポジウムに参加した。中国で日本人がしたことや、中国人たちの思いを受け止めようとする中で私は精一杯だったが、心で受け止めきれず、ありとあらゆる身体症状が出た。南京事件の経過やなぜ起こったか、被害の様子は事前に文献で調べて行ったのだが、実際にその場を訪れ、生存者の声に耳を傾けると、予想以上だった。

南京の学生たちは私たちと真摯に向き合ってくれた。怒りも表現してくれ、日本人に対しての疑問もぶつけてくれた。紛争解決や平和問題に取り組む日本人の先輩たちにもたくさん出会った。対話を通して互いの思いに耳を傾け、それぞれにできることを考える人たちに胸を打たれ、またぜひ訪れたいと思った。

帰国して、1人でも多くの日本人に中国でのことを伝えていきたいと私は願っていたが、帰国してからのほうが、日本人の認識のギャップに傷つき、孤立感と無力感があった。それでも何とか関心を持ち続け、つながっていきたいと思い、「ここからだで歴史を考える」の研究会に参加してきた。

帰国してからの2年は、私自身、とても大きな変化があった。そのひとつに母の発病があった。南京から帰国して1カ月後に母が発病したことも、何かの縁があるのかもしれないと思うようになった。治療が困難だと言われる病気と母が向き合う中で、母は祖父母との関係、これまでの生い立ちを私によく話してくれた。その中に、祖父が満州で軍曹をしていた話も含まれていた。母は闘病生活を通して、「なぜ、祖父が軍曹になれたのか」「どのように満州から帰ってくることができたのか」「戦争の記憶を祖父がどのような思いで抱え、死んでいったのか」を次第に考えるようになった。

不思議なことに、母方の祖父の戦争体験を引き継いだのが、父だったということも分かった。「じいちゃん（母方の祖父）は、死ぬ間際に『首が痛い、首が痛い』と言っていた。じいちゃんは、お父さんに中国人の首を切った話をして

くれたことがある。お母さんが病気になったのも、中国の人たちの怨念かもしれない」と、父が私に言うともなく呟いたことから、祖父が満州で中国人の首を切ったこと、穴に隠れていたたくさんの中国人たちの話を生前に父に話していたことが分かったのである。祖父はその話を懺悔するようでもなく、また自慢するようでもなく、淡々と父に話したという。

父からその話を聞き、エピソードの中に出てきた「漬物石」のキーワードから、私も父か祖父からか、以前にその話を聴いたことがあるかもしれないと思い当たった。そして、祖父が亡くなる間際に昏睡状態だったとき、「夜になると狐がいたずらをしに来る」と何度も言っていた不可解な言葉を思い出した。私の中でパズルのように、何かのピースがパチンと音を立ててはまったような感覚があった。

これまでも、日本人は戦争中にひどいことをしたという理解はあったが、祖父は違うかもしれないという願いのようなものがあったのだろう。文献を読んでも、祈るような思いで、祖父はこんなにひどいことはしていないという証拠探しをしていたように思う。しかし、父の話から私が思い当たったことや、2008年に立命館大学でのアルマンド・ボルカス氏のワークショップに参加したこと、独自に戦争体験談や文献を読み進めていく中で、ピースがひとつずつはまり、私の中で少しずつ準備ができていたのかもしれない。この2年間は、中国でのことは知的理解に留まり、自分の心や体に落ちていないというもどかしさがあったが、今回の南京訪問では、自分の心を開き、メンバーとともに感じることを大切にしたいと思い、参加に臨んだ。

今回は、サイコドラマや人間彫刻、絵画や粘土などの表現アーツの手法をしながら、メンバーとともに遊び、表現し合いながら、南京大屠殺記念館や燕子磯の記念碑を訪れ、生存者の証言を聴き、感じることを分かち合っていた。遊びの要素が含まれた表現アーツを通して、互いに心と体を開いていき、徐々に核心に迫ったテーマに近づくことで、プログラムに参加しやすく、自分の悲しみや怒りを表現しやすかったように思う。前回の南京訪問では、様々な情報や思いをインプットすることが多かったが、今回はプログラムでアウトプットすることがたくさんできたからか、ひどい身体症状は出なかった。むしろ、自分の心や体があるべき場所に戻っていくような、解放されていくような感覚が

あった。知的な理解ではなく、心や体が反応することに耳を傾ける感覚が回復していくような感じだった。それは、自分自身とのつながり、そして世界とのつながりが回復していくような感覚だ。

プログラムに参加して、私にとって、とても大きな出来事が2つあった。1つ目は、中国の男子学生が出してくれた日本加害兵のサイコドラマを見ていた時のことである。日本兵に向かって、メンバーが「日本に帰れ!」「殺してやりたい!」という声が出たとき、私はその日本兵や日本で加害を否定する人たちと同一化したような感覚があった。日本兵を罵倒するメンバーに、強い怒りと反発心が湧いたのである。私は普段、そうした感情を持つ日本人たち、そして私の父を軽蔑して嫌悪感を抱いていたのだが、私自身の中にもそうした感情が染みついていたことに驚き、ショックだった。その感情を自分の中に認められたことは、プログラムに参加しての大きな収穫だった。

2つ目は、プログラム最終日の燕子磯の慰霊のときに起こった。日本人とともに慰霊碑にひざまずき、手を合わせていると、記念館で見た日本兵が笑いながら中国人の首を切ろうとしている写真が急に頭に浮かんだ。そして、その首を切ろうとしている日本兵の顔が、私の祖父の顔と重なったのである。それは、日本人の加害と自分がつながった瞬間でもあった。心から深い悲しみと申し訳ない思いが湧き、私は「日本鬼子」の孫なのだと感じられ、涙が止まらなかった。

このような心からの悲しみと謝罪の気持ちが湧いたのは、プログラムを通して、サイコドラマや人間彫刻で、様々な人の戦争にまつわるエピソードを目で見ることで、その人の悲しみや怒りを感じたり、私自身がドラマの中で被害者や加害者の役をやらせていただいたこともあるように思う。私は役をしながら、何度も涙が出たり、怒りで体が震えることがあった。また、前回にもお話を聞かせていただいた幸存者の常志強さんに、メンバーが対話させていただく機会を得られたことも大きかった。心から、常さんがあの悲劇の中を生き残り、これまで生きてこれた、私たちにづらい過酷な体験を話してくださったことに、感謝の気持ちでいっぱいだった。南京事件当時に10歳にも満たなかった常さんと、今、目の前にいる常さんがつながって、私の心にその深い悲しみと怒りが感じられた。対話の後、常さんとふと目が合い、感謝と悲しみの気持ちで頭を

下げると、常さんは握手をしてくれた。とても温かく柔らかい手だった。

こうしたプロセスを経て、知的理解だけではなく、心と体に戦争の歴史と自分の感情がしっかりと落ちてきたのだと思う。慰霊碑に手をつき、謝り、涙を流していると、不思議なことに心の中の塊が少しずつ解けて、気持ちが晴れていくように感じた。

そのほかに印象的だったことは、記念館での絵画や記念碑での慰霊の最中に、そこに来ていた中国人がたくさん集まってきたことである。絵画の途中に子どもと一緒に絵を描いてくれたり、散歩に来ていたおばあさんが、「良い日本人もいることが分かって、今日、散歩に来て良かった」と言ってくださった。2年前の国際会議に参加した学生が、そのときの日本人メンバーの言動をよく覚えていてくださったことにも驚き、嬉しかった。それに対して、村本邦子先生が「蒔いた種がどんな形で実るか分からないが、継続しないと拾えない」と、継続して行動し続けることの大切さを話してくださった。何らかの表現や行動をし続けることで、リアクションがあり、またそれを受けて、自分の中に何かが生まれていくような感覚に、希望と温かさを感じた。

最後に、今回参加するにあたって、私が努力したことがあった。中国に行く前の2週間に仕事の合間を縫って、中国語を必死で勉強したことである。言語には、それが生まれた文化と歴史を垣間見ることができる。実際には、片言の基本会話しかできず、中国では通じたり、通じなかったりしたが、自分の言葉を通して中国の人とつながれることも、とても嬉しかった。記念館や燕子磯を訪問したときに、おばあさんに時間を尋ねられて中国語で応えることができたことや、小学生の女の子に年齢を尋ねて答えてくれたこと、中国のメンバーたちと「再見!」「见到你很高兴!」と言い合い、最後に握手をしたり、ハグし合えたことがとても嬉しかった。

ほんの少しずつの歩みであるが、これからどのようなプロセスを経て、どこに辿りつくのか。今回のプログラム参加では、ようやく深い悲しみと怒りを感じられ、互いに共感し合う段階が見えてきたように思う。これからは、意味付けと統合の段階に入っていくと思うが、私の中では、少しずつ自分自身と世界に近づき、つながっていくような希望を感じている。自分自身の心と体につながる事が、真に他者とのつながりを回復していくことにつながるように、今

回の体験を通して感じている。これから、その先に何があるのかを見続け、関わり続けていきたいと思う。

こうした貴重な経験をさせていただけたのは、企画や段取り、当日の進行をしてくださったアルマンド・ボルカス氏や笠井綾さん、村本先生、中国の先生方、そしてプログラムに参加して向き合ってくださった中国人のメンバーの皆さん、支えてくださった日本人のメンバーの皆さんの存在があってこそだと思う。この場をお借りして、感謝いたします。

HWH (Healing the Wounds of History: 治愈历史的伤痕) 有感 ～以我和战争造成的影响之间关系的角度～

渡边佳代

2007年，我参加了国际会议“回忆南京—南京悲剧70周年纪念”。我开始对战争和暴力给人造成的影响产生兴趣，是由于我至今在临床上所从事的支援女性和孩子的工作，以及我自己本身的问题。从小时候起，我父亲每次看提到中国和北朝鲜的新闻时都会变得情绪化。父亲那个样子令我感到痛苦，也使我讨厌他。但是在爷爷的葬礼上，看着父亲一直重复着外公因胳膊受伤而未能上战场，因而一生都为此痛苦，我才第一次明白父亲的背后深深的悲伤和痛苦。

听我母亲说，她从小就听着外公说他在旧满洲国的哈尔滨做军阀时的经历长大，但现在她都已经不记得那些故事了。据说母亲那边的祖父带着在满洲的大户人家抄到的画轴和还留在右大腿部的子弹回到了日本。母亲也不知道他到底是怎么活下来，又能活着回到日本的，而对祖父在战争中究竟做过什么她也回答一无所知。我猜想，被子弹打中却还能活着回来的祖父，一定有其他很多人因为他而失去了生命。

祖父在我小学六年级的时候就去世了。祖父非常疼我，在我心目中，他是个非常和善，有正义感的人，我很喜欢他。然而就是这么令我敬爱的祖父跟我说：“战争太可怕了。能杀很多人的才算是正义。”当时他失落的表情给我留下了深刻的印象。对当时还小的我来说，祖父杀掉的一定是魔鬼。但如果想到被杀死的人还有家人，如果他们活下来的话还会有像我一样的子孙，祖父就成了令人发指的